

●キマワリアラゲツノミタケ (*Ophiocordyceps* sp.)

キマワリアラゲツノミタケは、朽木の内部に生息する甲虫類の一種であるキマワリの幼虫を宿主とします。子実体はいわゆる「突き抜き型」で、朽木の内部から生えてきます。

上写真の個体は瀬戸市の山林で見つけたもので、林内の倒木より発生していました。キマワリアラゲツノミタケは通常未熟株が多いのですが、この個体は成熟後老成したものです。

●キマワリアラゲツノミタケの完熟したストローマ



キマワリアラゲツノミタケの成熟(完熟)した子実体の結実部は、淡い褐色で子嚢殻が埋生していますが、子嚢殻の孔口部が少しだけ突出しています。子嚢殻の中には棍棒型の子嚢が入っており、更にこの中に糸状の子嚢胞子が入っています。結実部が成熟すると子嚢胞子が周辺に散布されます。

●キマワリアラゲツノミタケ



通常は朽木内部から子実体のみが出ている事が多いのですが、中には宿主本体が剥き出しになっているものも見られます。これは風雨などの影響で朽木の風化が進み、樹皮が剥がれたためです。

「キマワリアラゲツノミタケの子実体は、宿主の尾部から1~2本生える」と書かれている専門書もありますが、頭部や腹部から生える個体も結構存在しますし、本数も3本以上生える事もあります。

●クチキムシツブタケ (*Perennicordyceps cuboidea*)

クチキムシツブタケは、朽木の内部に生息する甲虫類の幼虫を宿主とします。子実体はいわゆる「針タケ型(ツブタケ型)」で、朽木の内部から生えてきます。子囊殻は裸生し、淡黄色の長卵型をしています。

上写真の個体は、瀬戸市の山林で見つけたもので、林内の倒木より発生していました。もう少し成熟が進行すると、結実部は淡褐色に色付いてきます。

●クチキムシツブタケ (*Perennicordyceps cuboidea*)

クチキムシツブタケの子実体は、宿主の頭部、腹部、尾部より数本生じます。上写真の個体は頭部と尾部より2本の子実体が生じています。宿主は甲虫の一種であるキマワリの幼虫でした。

クチキムシツブタケの子嚢胞子は糸状で、128個の二次胞子に分裂します。二次胞子の形状はクサビ形や弾丸型です。

●キマワリアラゲツノミタケへのクチキムシツブタケの重複寄生



クチキムシツブタケは他の冬虫夏草の仲間の古い子実体に新たな柄や子実体を形成する事があります。つまり、他の種類の冬虫夏草菌に寄生する訳で、この様な寄生様式を「重複寄生」といいます。

上写真はキマワリの幼虫に寄生したキマワリアラゲツノミタケにクチキムシツブタケが重複寄生したもので、子実体の結実部から新たな子実体が発生しています。

●キマワリアラゲツノミタケへのクチキムシツブタケの重複寄生



クチキムシツブタケは、今回採取したキマワリアラゲツノミタケのみならず、オイラセクチキムシタケ、コメツキムシタケなど甲虫類の幼虫を宿主とする冬虫夏草菌に重複寄生する事が知られています。

上写真の個体では、一番右の子実体はキマワリアラゲツノミタケの老成したもので、真ん中と左の子実体ではキマワリアラゲツノミタケの古い柄の部分にクチキムシツブタケの子実体が形成されています。